



樹蔭静け

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL：0155（37）5501
発行日 令和3年11月30日

三条高校を会場に各種教員研修実施



11月5日に管内高校教育研究会・英語分科会が本校を会場に行われました。新明教諭と櫻井教諭の1年次での研究授業が中心でしたが、参加された21名の先生方にはその時間帯の全ての英語の授業を自由に参観していただきました。新明教諭はペアワークやグループワークを通し、リーディング、リスニング、スピーキングなど多様な活動を展開しました。また、櫻井教諭の授業は不定詞を使った英作文をビンゴシートを用いてゲーム感覚で行いました。いずれの授業も、生徒の積極的に課題に取り組む姿勢や英語での発話を楽しむ様子が見られました。

また、17日には道東ブロック授業改善セミナー（生物）が実施されました。これは道教委が理科の授業改善に向けて結成した授業改善検討チームの一員である堀口教諭の研究授業を、東京学芸大学講師・中西史先生をお迎えして実施したものです。道東各地から25名の先生方の参加がありましたが、同時にオンライン中継もしており、固定カメラに加え、ハンディカメラで生徒の様子を中継しているという最先端（？）の授業となりました。テーマは「肝臓のはたらき」で、プリント

の資料から肝臓の働きをグループで考えながら、課題にあたっていく授業でした。白黒のプリントでは確認しにくい事項を各自のスマホでカラー資料を確認したり、課題に関する資料をネットで調べるなど、ICTを積極的に活用する場面もありました。中西先生をはじめ多くの先生方から、生徒の熱心に議論しあい周囲と交流する姿を評価していただきました。

また、22日には本校教員が一堂に会して校内研修が行われました。内容は来年度から本格実施となる新学習指導要領での評価についての研修をメインに、ICT活用に関する研修と来年度以降の総合的な探究の時間の計画について研修しました。評価については各教科ごとに集まり、実際の授業計画を立てながら評価の観点について話し合い、来年度の教育計画の作成に役立てていきます。

今の時期は教員研修の季節です。17日は研修ラッシュで、広尾で国語、清水で地歴公民、足寄で数学の管内研究会が行われていました。本校からも各教科の先生方が参加。数学では山室教諭が本校でのICT教材活用の取組を発表しました。今後、研修の成果を教科内で共有して授業改善につなげていきます。



進路探究講話

本校のCLASSプロジェクト・コンソーシアムメンバーによる進路探究講話を実施しました。まず3年次の教員志望の生徒を対象に教育大釧路校の宮前耕史先生による講話「なぜ社会と連携した教育を展開しなければならないのか」を実施しました。「地域と連携していくことにより学びが広がり、深まります。さらに北海道の広域性から僻地の学校が多い実態に即して、子どもたちが自分の地域を誇りに思えるよう、地域の一員として一緒に地域を創造する教員養成が釧路校の使命なのです」と話してくださいました。

また、北海道医療大の長谷川聡先生に2年次生の看護を志望する生徒を対象に医療現場の実態や看護師の心構えなどを話していただきました。「現在は、より専門性の高い主体的な“看護判断”ができる看護師が求められています。さらに経験を積むといずれ看護管理も求められます。それは大学でしか学べないので、大学に入り直して学ぶ人も多いのが実態です。いずれにしろずっと学ぶ必要があります。ですから看護志望の人はまず勉強慣れることが必要です。ぜひナイチンゲールの『看護覚え書き』を読んでください」と話してくださいました。

小中学校でインターンシップ

昨年に引き続き、道教委主催事業「高校生の小・中学校等におけるインターンシップ」が実施され、西小学校に2名、第2中学校に2年次生13名の教員志望の生徒たちがインターンシップに臨みました。小学校では主に1年生の指導補助を行いました。子どもたちの元気さに負けないようしっかり目配り気配りをしていました。一方、第2中学校に行った13名はそれぞれ希望する教科に分かれて授業補助にあたり、実際にSHRや授業も担当したりとバラエティーに富む内容にチャレンジしていました。中学校では既にタブレット導入が進められており、思いの外、授業で使用されていることに生徒たちはびっくりしていたようです。

いずれにしろ人に教えることの難しさを肌で感じ、コミュニケーションの大切さを学んだようで、2組の佐藤優羽君は「今回の体験は、反省点より新たな発見や楽しみが増えたものでした。教職が確実な目標へ変わりました」と振り返っていました。

この体験を生かし、ぜひ、素敵な教師になってください。



生徒の前で話す3組南波くん

第17回 2-2担任・茶道・ハンドボール部顧問 小林 郁美 教諭

折れることなく、しなやかに生きてほしい

◆「できない」ではなく「どうやるか」

長い間Cプロの担当で、週の最後の時間を「つらい」とか「だるい」とか言わずに、むしろ気持ちのよい締めくくりにしたいなあと思ってやってきました。今回の振り返りでは「ためにならなかった」や「やる気が起きなかった」という否定的な反省がゼロだったのが本当にうれしかったです。生徒たちも英語を学んでいるけれど、実際に使う場面はなかなかありません。1対1の場面は作れませんでしたが、話してみても通じ、通じなかったという経験が大事なのだと思います。

とかく今の子どもたちは結果が見えないことを恐れます。でもそのままだと何も変わりません。一步踏み出した時に見える景色は変わります。私も英語は本当に苦手です。海外に行ったことはもちろんパスポートを取ったことさえありません。今回、外国の方々に説明する役目があったのですが、うまく説明なんてできないわけです。困ったなあ、どうしようとなりましたが、とっさに周りにいた初対面の方に助け人を頼んじやいました。「できない」ではなく「どうするか」です。身をもって経験できました。外の方々とやりとりは必ず何かを得られるものです。というわけで、今度、娘と英検にチャレンジすることに決めました！

◆人と直接つながっていたい

自分の高校時代は恥ずかしながら何も考えてませんでした。気がついてみたら卒業で、みんなはしっかり将来のことを考えて進路を決めていました。「あれっ、いつそんなことを決めてたの？」って一人取り残されていました。20歳になってもぶらぶらして、恥ずかしくて成人式にも行けませんでした。とにかく何かをして食べていかなければ

らないと考えてたどりついたのが栄養士でした。ですから最初に入ったのは短大です。教員免許もとれるということで教育実習で中学校に行く面白くて。食で人とつながるより直接人とつながっていたいと思って教員になることに決めました。

丁度その時、高校で家庭科が男女共修になることが決まっていた、それなら高校の免許が必要だということで親に頼み込んで大学に編入しました。母校の高校で教育実習に行った時は、担任の先生に「できの悪い生徒の気持ちがわかる良い先生になれるですね」と真顔で言われました。喜んでいいのかどうなのか…。

◆人は人で動く

期限付き教諭を経て、晴れて教員になれたのは27歳の時です。初めて十勝に来ました。何もわからないまま、最初の3年間は必死でした。やんちゃな生徒もいて、先生に殴りかかろうとする生徒を後ろから抱えて止めようとしたこともあり。つらいことがあっても自分一人で抱え込むのではなく、そのときは素直に人に頼む。人は人で動きます。自分ができることをしっかりやっていたら誰かが助けてくれるものです。私はこうして世の中を渡ってきました(笑)。

自分の生き方を振り返ると生徒たちには、決して折れることなくまた起き上がってくるように、しなやかに生きてほしいと願うのです。



インタビュー

きらり

様々な活動で本の魅力を伝える図書館を紹介します

局長・山川 和哉 くん 副局長・山本星士郎 くん

局員:小川沙央里 さん 丹治美夕羽 さん 西島 萌里 さん



高文連十勝支部ビブリオバトルでチャンプ選出、道図書館報コンクール『優良賞』受賞の他に、帯広市図書館『webでお話し会』朗読動画やオリパラ展示など、その活動がメディアに続々とあげられている図書館のメンバーにお話を伺いました。動画が現在YouTubeで公開されている朗読は放送局

から朗読の指導、美術部から作品世界を絵に表現してもらい完成となりました。振り返って、副局長の山本くんは「今までアクセントや抑揚などを意識をしたことがなかったので本当に新鮮でした」と新たな発見に喜びを感じているようで、小川さんは「地の文章の読み方にも気を遣う必要があり、とても難しかったです」と話し、アドバイスをしてくれた放送局に感謝の気持ちを口にしていました。

図書館に入局したきっかけを聞いてみると、みんな「楽しそうだったから」と口を揃えました。親しみやすい図書室にしようと協力しな

が工夫していることが楽しさの原点のようです。活動もそれぞれの得意分野を生かしており、西島さんと丹治さんは折り紙を中心とした装飾や視覚的に工夫したポップで人を惹きつけようと力を入れています。西島さんは「ぜひ入口の装飾をみてください。怖い本のタイトルは私が描いています」とPRに力が入ります。

みんなで和気藹々とした雰囲気伝わってきます。ビブリオバトルもまず全員でやってみて自分たちで代表を決めたそうです。代表の一人に選ばれた丹治さんは「『余命10年』という本を紹介しました。自分が心動かされた本をみんなに勧めたいです。本も好きですが文章を書くことも好き」ということで、図書館報『Library』制作も楽しそうです。「枠内に字数をおさめるのが難しいですが、ぴったりにきたときは満足感に浸れます」とのこと。

ビブリオバトルで優勝した山川局長は「本を通して知らなかった世界を知ることが読書の喜びの一つ。その喜びを伝えたいと思っていますが、どう人に伝えるかがとても重要です。ポップや装飾などもその延長上にあります。図書室には本の世界に引き込まれるような様々な工夫をしていますので、まずは足を運んでみてください」

読書の秋です。図書室のポップからお勧め本を手にとってはいかですか。それが新しい世界の入り口です。